

“農と食” 北の大地から

連載第40回

グリーンツーリズムの可能性
(その2. 「夢の農村塾」の挑戦)

ルポライター
滝川 康治



増える修学旅行生の農業体験も 受け入れて“本物の交流”を実現

「夢の農村塾」のメンバーのビニールハウスで野菜田の支柱立て作業を体験する高校生たち写真右。無類の農家と交流できる企画が好評だ写真提供：北空知 北部地区農業改良普及センター。「農村塾」の会議では、農と食に対する前向きな発言が相次いだ昨年12月26日、深川市内で



あるがままの農村の良さを伝えて確かな手応え

師走も押し迫ったある日、中学・高校生による農業体験を受け入れる活動などを続ける、「元気村・夢の農村塾」(古口保幸代表の会合が深川市内で開催されていた。同塾のメンバーは現在、北空知の一市三町で農業を営む四十戸。農閑期に集まって議論し、今後の活動の進め方を詰めようというのである。農村塾が誕生してから四年目の〇五年は、修学旅行生を中心に道内外から

北空知の農家有志でつくる「元気村・夢の農村塾」が取りくむ農業体験の受け入れ事業が、年を追うごとに広がりを見せている。体験観光に走らず、少人数で受け入れ、素顔の農家と交流できる企画を用意して、関西などの高校の修学旅行生や札幌圏の中学生の総合学習に人気が高い。「あるがままの農村を体験してもらおう」という活動の歩みや、メンバーたちの心意気を取材した。

延べ八百八十一人を受け入れ、さまざまな体験メニューを提供した。各農家は一回に三―五人を受け入れており、回数が多い農場では年間五十人前後に上るところもある。「あるがままの農村を体験してもらおう」をモットーにしているが、忙しい農作業の合間を縫っての取りくみだから、いろんな課題をかかえるようだ。この日は、反省点をふり返り、来年度の見通しについて確認するうちに、「食農教育が話題にのぼった。「北空知では年間四十五戸の農家が減っているけれど、一方で食料がどう作る

の蓄積は大きな力になると思う」こんな前向きな意見が相次ぐなかで、「農場から子どもたちの声が聞こえる、楽しい農業をしなければいかんよね」という発言に、メンバーたちが大きくうなづく場面もあった。

この日の出席者は、農家と関係機関の職員合わせて二十人ほど。昨今の米価低落によつて空知の米どころはきびしい経営状況になっているが、農村塾の人たちは決して「嘆き節」を口にしない。それは、これまでの体験交流の実践を通して、確かな手応えを感じて取っているからである。

体験観光の道を走らずに
増える修学旅行生の訪問

「我々の活動の柱は「農業体験」と「農産物のPR」の二つで、「観光農園とは違う」というスタンスでやってきました。修学旅行生などとは人間として付き合いきたから、一つの農場で受け入れるのは少人数で心が触れあえる範囲にしている。最終的な目標は、我々の作った農産物を買って、食べてもらえる人をつくることです」

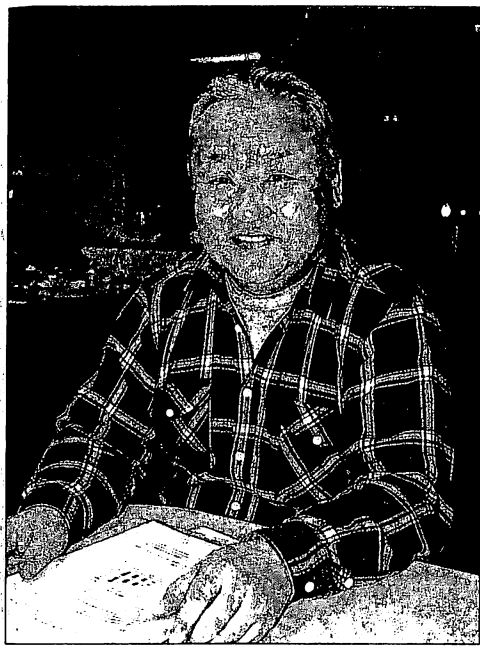
られているのかわからない、牛や土にさわったことがない子どもが札幌にもいる。あるフオーラムで、「どんな思いで体験受け入れをやっているのか」と聞かれたので、わたしは「食農教育の場なんだ」と説明したんです」新規就農を志す若者たちも応援してきた年配の農家がこう話す、「いい作物を育てて収穫し、食べてもらうことを考えているのだから、俺たち

のほうは「食農教育」という難しい言葉を使う必要はないんじゃないか」「食育までは無理でも、農村の良さを伝えることはできる。たとえば、引きこもりの子が農場に来て自然に溶けこみ、農業体験をすることで学校へ戻っていきけるようになった―我々の取りくみの成果だと思ふんだ」などの声が返り、それぞれの体験を交えながら率直に意見を交換しあう。

十四ヘクタールほどの農地で米や花卉、小麦などを作っている、代表の谷口さん(1956年生まれ)は農村塾の目的や特色をこう説明する。

中心になつている農業体験の受け入れ人数は、初年度は二百八十人ほどだったが、年を追って増えており、〇六年度は千人前後になりそう。全体の六七割を修学旅行生で占め、札幌市内の中学生の総合学習や農業高校生の実習などが続く。修学旅行を利用した体験交流は関西の高校生が多い。

〇二年の発足時には十九戸。それがこの四年間で受け入れ農家は倍増し、深川市のほかに妹背牛町、秩父別町、



「我々の作った農産物を食べてもらえる人をつくるのが最終目標」と力をこめる代表の谷口保幸さん

北竜町へと広がりを見せている。三代から七十代までのメンバーが手がけている分野は、米や野菜、果樹、花卉、肉牛などと幅広い。

「生きているものの生命をいただくことで我々も元気になる」という情報発信をめざしたのが農村塾の原点。申し込み人数が増え、学校やインターネット、旅行会社経由の三つで打診してきます。でも、それを流れ作業として受け入れると観光化してしまう。観光ビジネスという位置づけで農業体験に走ってきた先進地が停滞しているのは、子どもたちとのコミニケーションを図れる範囲で受け入れてこなかったから

受け入れは355人／戸 農家の都合に合わせて体験

農業・農村体験の大まかな流れは次のようになっている。

学校や旅行会社などからの問い合わせを受け付けるのは、深川市郊外にあ



「農家の女性の意見が反映しやすい体制にしています」と話す普及センターの古家貴美子さん

ではないですか。汗を流し、収穫したものに手を加えて食べる―それが食農教育だと思えますね」
こう力説する谷口さんは、同じ目標で農業を語り合い、メンバーたちに無理がかかる受け入れをせず、長続きする運営を心がけてきた、とふり返った。

都市農村交流センター「アグリ工房まあぶ」(第三セクター)が運営。ここで日程や体験内容、料金などを協議し、農村塾の役員と調整する。行政や農協、道の農業改良普及センターもハード、ソフトの両面で協力してきた。

道内外から訪れた中、高校生たちは「アグリ工房まあぶ」に集合し、農村塾のメンバーの車に分乗して農場へと向かう。一軒の農家の受け入れは三〜五人と少人数にとどめており、万一の事態に備えて傷害保険なども完備した。

各農家で家族の紹介や作物の話、仕事の流れなどの説明を聞いてから、まずは四十分ほど作業する。ひと息つ

て移動し、別の作業をやり、収穫物の

試食もしてみる―。その日のためにわざわざ準備するのではなく、それぞれの農家の作業に合わせた体験をするように心がけている、という。

直売用の野菜を収穫する、スイカの下に敷物を置く、イチゴやリンゴを摘む、野菜に支柱を立てる、牛の世話をする…など作業は多岐にわたる。

「農業のプロが指導し、料金をいただく」というのが方針の一つ。その体験料金は、半日コースで二千五百円(税抜き)、一日コースは五千円(同)が基本である。〇五年の体験料収入は総額三百万円あまり、多い人では二十万円ほどになった。前出の声のように費用弁償的な色彩が濃いのが、農村塾の人たちは、おカネの多寡よりも生徒たちとの交流を楽しみにしているようだ。

もぎたてを食べる感動！ 生徒からの便りは宝物に

「農家の人には「ぜひ、もぎたてを食べさせてください」とお願いするんです。子どもたちは「キュウリってこんなに美味しいんだ」と感動するし、枝豆の収穫では青虫やカエルを見て、鎌を使つて、茹でて食べてみて…と何度も喜んでいきます。病気がちの子は事前に学校から情報をもらつて対応しますが、農場ではその子どもたちが一番生き生きと

していることが多いですね。

同じ農家に札幌の中学生が一回訪れたのですが、経営主の話聞いて具体的に考えるようになり、「農業をやるべく使わないようになりたい」などと感想を言ったりして成長しています。継続することの大切さを感じました」と笑顔で話すのは事務局役を担当してきた空知北部地区農業改良普及センター指導主任の古家貴美子さんである。

子どもたちから寄せられる札状や感想文は、メンバーたちの宝物になっているとか。その一端を紹介しよう。

「…あの稲抜きはとでも大変でした。四時間で十萬四千八百二十二本ぬいたので、とても達成感がありました…」
〔札幌の中学生〕

「…この体験を終えて、お米が今まで以上においしく感じました…」〔同〕

「…細かい作業や立ち仕事を毎日続けられているみなさまがとてもすごいと感心します。そしてプロクッキー味のソフトクリームの味は一生忘れません。本当にいい所に行けたと思います…」〔大阪の高校生〕

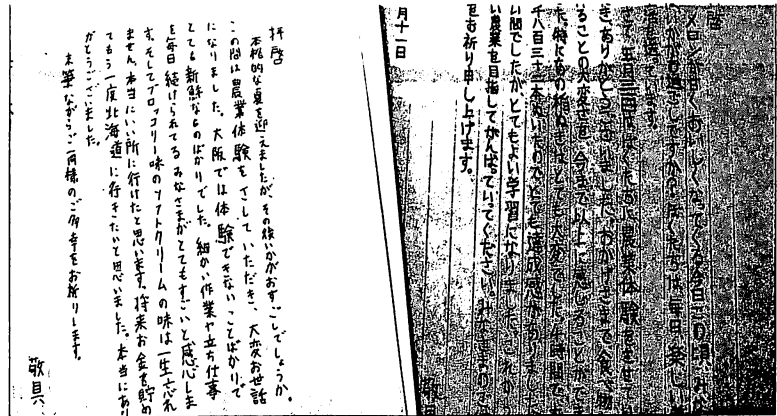
こうした反応が返ってくるようになった農村塾の活動は、十一年前に谷口

さんらが立ち上げた深川グリーンツーリズム研究会の活動や、若手農家による農場看板の設置(98年)、地元通信制高校の農業体験受け入れ(99年)などの積み重ねが土台になっている。

深まる農家の女性の意識 ネットワークも広がる

農村塾の役員たちは一月下旬、総合学習の一環で毎年やってくる札幌の北野台中を訪問し、学校側や生徒たちと交流する。食卓にあがる農産物の生育状況や収穫物の様子を伝える冊子を作る計画も練っている。

空知管内でグリーンツーリズムに取りくむ人たちのネットワーク「そらちDEい〜ね」が二年前に発足した。年を追って増える修学旅行生に対して、



メンバーに届いた子どもたちの札状の一部。率直な感想が励みになり「うちの宝物」と楽しみにする人も

敬目六



畜産農家で子牛の世話—生き物と触れあえる貴重な体験だ
(写真提供=空知北部地区農業改良普及センター)

農村塾が受け入れ可能な人数には限りがある。「たとえば一学生二百五十人の希望があつても、うちで受け入れられる最大人員は百三十五人／回ほど。そこで、二百人以上の団体は「そらちD

Eいゝね」と分割して対応しています」
〔谷口さん〕と、ネットワークを活かして調整する場面も出てきた。
この活動の仕掛け人の一人でもある普及センターの古家さんは、農村塾の人たちの意識の深まりをこう見る。

「農業体験は子どもたちが家庭のなかにも入るので、(体験交流の)カギを握る女性の意見が反映しやすい体制にしています。その結果、農家の女性が前面に出て直売所やイチゴ園を開いたり、ブルーベリーやハスカップなどの小果実を作る人が現れました。

「農業そのものをPRしなければ…」という気持ちになつてきた。地域全体で子どもたちを育てる、環境づくりも積極的に取りくむ—農家

自身が変わつてきたな、と痛感しています」

師走の会合を取材してみても、メンバーたちの心意気はよく伝わってきた。今後は、いままでに培つたノウハウにいつそう磨きがかかるのだろう。

民泊の実現に向けて準備 「本物の交流」へ心新た

これからの取りくみとして、農家に宿泊しながら体験交流を進める構想を練っているが、「地下水を利用して農家には(衛生面などの)規制が多い」(古家さん)といった課題もある。そこで、保健所の担当者から講習を受けたりして、条件が整つた農家から簡易宿泊所の営業許可を取得する準備を始めている。これが実現すると、活動は一段と充実してくる。

食育の教材や訪れた子どもたちに送るメッセージを作つたりする部会を創る計画も進めている。農業体験にやつてくる中・高校生たちに直接農産物を売りこむようなことは考えていないが、さまざまな活動によつて「空知の農産物」をPRしていきたい—というのが

メンバーたちの大きな目標である。十年ほど前に谷口さんとともに農業体験の試みを始め、グリーンツーリズムのアドバイザー役もつとめてきた拓殖大学北海道短大教授の橋本信さん(1949年生まれ)がエールを送る。

「農村塾の人たちは「訪れる」子どもたちが元気をくれる」と口々に言います。(米価の下落などで大変ななか、農家や農村を)理解してくれる人が増えることが営農の励みになつている。「経済的にどうなのか?」について、成果はまだ出ていませんが、前向きな意欲が大事であり、その先に地域のビジネスとして成り立つ方向性が出てくる、と期待しています」

田園地帯が広がり、観光化されていない北空知の地にしっかり根を張る農村塾の試みは、「農家との本物の交流」を求める風潮のなかで新たな段階を迎えた。全国各地のグリーンツーリズム仲間との交流も進んでいる。中・高校生に続いて、親子連れや団塊の世代の体験交流を模索する動きもある。

肩肘を張らず、自然体で「農と食」の距離を縮めようとする北空知の人たちの挑戦が今年も続く。